

造化の花ことば

小林守城

水芭蕉が腐れ湿地に結縁している  
片栗は日陰斜面に群生している  
そよと吹け 春の風ならば 北へ

フクシマは不信のほのおハルジオン  
連翹だった 一人居ぬ庭の宴

古希を過ぎて  
少しは無心になれたのか  
懐かしく新鮮にうつる  
鳥や虫や花の知らせ  
一期一会の朝夕が  
鳥や虫たちの鳴き声が  
意味らしき響きをもつてきこえてくる  
風にゆらぐ花の姿や色合いが  
匂いの知らせが  
何やら意味ありげになってくるのだ

花の無心にいたる なんと難しいことか  
花にはどこまでも関係ない

花はどこまでも拒んでいる  
いや 言葉は届いていない  
存在の花  
だから 人には  
むやみに恋しくて  
遠くて美しい

その造化において  
無心に見なければ  
見たことにはならぬだろう  
言葉の文化史を越え  
なつかしい言語野の向こうに

只今に ひたるだけの  
行為の直観がある  
細胞の記憶がある  
それが詩だ

無心が後ろ髪を引くとき  
詩は瞬間に響き 走り去る影だ

その影を追いかけ  
輝かしい人間の文化を  
どうぞと言っても  
たかが知れたものだろうが  
3. 1 1 以降は  
それしかないのだ